

Title	<批評・紹介>吉田金一著「ロシアの東方進出とネルチンスク條約」
Author(s)	森川, 哲雄
Citation	東洋史研究 (1985), 44(2): 347-354
Issue Date	1985-09-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154108
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

一九八四年四月 長沙 湖南人民出版社
B 6 版 一六二頁 ○・八三元

吉田金一著

ロシアの東方進出とネルチンスク條約

森川 哲雄

一七世紀の露清關係史についての研究はこれまで決して少なくはなかった。最近でも本書の主題に關係する著作として M. Mancall, *Russia and China, Their Diplomatic Relations to 1728*, Cambridge, 1971. Г. В. Мелихов, *Маньчжурь на северо-востоке (XVII в.)*, Москва, 1974. В. С. Мясников, *Империя Цин и Русское государство в XVII веке*, Москва, 1980. Е. Л. Беспрозванных, *Прижурье в системе Русско-китайских отношений*, Москва, 1983. 等をあげることが出来る。しかしこれらの中には事實關係よりも自らの政治的立場を優先したものも見られる。

本書の著者、吉田金一氏には『近代露清關係史』（近藤出版社、東京、一九七四）という優れた概説書がある他、数多くの露清關係についての研究がある。氏の今回の著作はそれら従来の研究をもとにはしているが、新出の史料を利用して書き改められており、その意味で全く新たに書き下されたものと言ってもよい。氏の本書に對する態度は、一切の政治的偏向を排除し、史料にもとづいた實證を

重視するところにあると言えよう。

ところで近年、一七世紀の露清關係史研究をめぐる状況は大いに變わつて來た。即ち根本史料たる文書史料の相次ぐ公刊である。ソ連からは *Русско-китайское отношение XVII века*, Том 1, II, Москва, 1969, 1972 が、またネルチンスク會談に清朝側の通譯として參加したスレイラの日記が J. Sebes, *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk (1689): the Diary of Thomas Pereira, S. J., Rome, 1961* とし、更に中國からは清代の露清關係史料たる『中俄關係檔案史料選編——第一編』（順治、康熙、雍正）——（北京、一九八一）が出版されている。この他にもいくつか新出の朝鮮史料もある。とは言え従來から知られている膨大な史料に加えてこれらの文書史料を扱うことは決して易しいことでは無い。しかし著者はこれらの史料を十分讀みこなし、従来の成果を凌駕する優れた著作を出されたのである。

まず本書の構成から紹介しよう。

はしがき

第一章 清が入關するまでのロシアと中國の關係

第二章 銀鑛石を求めて——ロシア人の沿アムール、ザバイカル進出——

第三章 烏扎拉村敗戦の衝撃——ロシア人の本格的沿アムール、

ザバイカル進出と清の衝撃——

第四章 露清外交の開幕

第五章 スパファリ大使の中國派遣

第六章 清國におけるスパファリ大使

第七章 康熙帝の沿アムール作戰

第八章 ネルチンスク條約締結

第九章 ネルチンスク講和會議後の露清關係

第一〇章 結び

次に各章の概要と注目される論點を紹介してみたい。

第一章においては兩國の關係の始まり、一七世紀前半のロシアとモンゴルとの接觸、またロシアが明代中國へ二度に亘って派遣した使節について記している。この中ではロシア人として初めて中國へ行ったペトリンとこれに次いで同地に行ったとされるヴェルシニンらの持ち歸った、明の皇帝の敕書を翻譯、紹介しているのは興味深い。但し敕書に關する問題點の多くはソ連の研究者の見解に據ったものである。筆者は一七世紀前半においては、ロシアにとつて中國はまだ「遠い國であつた」ことを強調している。

第二章ではロシア人の進出前の沿アムール、ザバイカルの狀況、その部族分布、またロシア人の同地方への進出について述べる。著者はこの中で沿アムール、ザバイカルの諸部族についての從來の研究を批判、攝取し、同地方の部族の分布を確定する。そして結論として「東北の海濱のギリヤーク（費牙喀）、オルチャとゴルジ（使大國）および西北の海濱のザバイカルの諸部族までは、清の支配は及ばず、清に服屬・納貢していたのは、ダウル（索倫部と薩哈爾察部）とジュチュエル（黑龍江虎爾哈部と東海虎爾哈部）止まりであるというのが實態であつた。」と述べている。この見解は次の論點とも關係しており重要である。すなわち著者はロシア人が沿アムール地域に進出する前にそこが「無主の地」であつたのか、それとも清朝の勢力圏に入っていたのか、について検討する。著者がこの問題

でソ連の研究者（例えばメリホフ）と論争をしていることは知られている。著者の見解は、沿アムールに居住していた索倫、薩哈爾察、虎爾哈と清との關係は太宗の時には單に納貢、交易の關係だけではなく、族長たちとの婚姻、官職の授與が行なわれたこと、更にこれら諸部族に對しくり返し征討を行ない、抵抗したところには「兵將留守」と呼ばれる部隊を駐留させたこと、従つてロシアがこの地方に進出する前に清朝はかなり主權を行使していた、というものである。これに對しメリホフは、當時清朝の軍事的影響がこの地方に及んでいたことを認めたものの、清の領土ではなかつたこと、「兵將留守」については通行本の『清實錄』では兵と將との間に圈點があるから造語ではなく、「……兵。將留守」と讀むべきだと反論した。しかし著者は再度この考えを批判し、「將」字の右片に付せられている圈點はこの「將」が去聲であつて平聲でないことを示したもので、句讀點とすべきでないとした。しかし著者は最近滿文實錄の當該部分をあたつた結果、「兵將留守」は成語では無く、「兵將を留守す」と讀むべきだと訂正した。ただ沿アムールと清朝の結びつきが強かつたという著者の見解は間違つていない。

第三章においては一六四九年のハバロフの沿アムール探檢、清軍との衝突とその勝利、一六五三年のステパノフの同地方への派遣、清軍の反撃とステパノフ軍の敗北、清の對アムール政策等が順を追つて記される。從來の研究と事實關係において基本的相違は無いが、かなり詳細になっている。ステパノフ軍に對する清側の攻撃の狀況については朝鮮側の記録を十分利用されていることは注目に値する。

露清の初期の軍事衝突の後の沿アムールの狀況について著者は

「一六六〇年ころから暫くの間、ロシアも清もそれを自國の所屬としながら、實際にはあまり手を出さない、一種の中間地帯のようになっていた」と説明している。

第四章ではバイコフ、ベルフィリエフの清朝への派遣、ガンチムールの歸屬問題に焦點があてられる。この中で著者はバイコフの遣使は清との交易という點では必ずしも成功しなかったが、中國探索という面ではかなりの成果があがつたとし、またベルフィリエフの遣使は儀禮の面では清と對立したが、交易面では成功したと評價している。本章における問題點の一つはガンチムールの納貢についてである。この點についてかつて若松寛氏が、ガンチムールは一六五一年にロシアに納貢する以前には清に納貢義務を負っていたと見なすべきだという考えを出したのに對し、著者はこの見解には確たる根據は無いとしりぞけ、ガンチムールはロシア亡命後にロシア側に供進した通り、それまではどこにも納貢していなかったこと、またロシアに納貢したことは服屬と見なすことは出来ないことと述べている。恐らくその通りであろう。なおガンチムールが清に降り、「ボグドイ・ツァリに四等貴族として仕え」「クマルスキー城塞のロシア人を攻めるに際し、特別連隊の赤い指揮官として勤務した」ことがバンティシユ・カメンスキー編の資料集に見えるが、著者は「四等貴族」を「武官の正四品の佐領」、「赤い指揮官」を「正（または鎮）紅族の指揮官」であると記している。しかしこれらの點についてはすでに若松氏の指摘したところであるが、何のコメントも附していないのは理解しがたい。

第五章、第六章では一六七六年におけるスパファリーの中國派遣を中心に、その前後の露清、露蒙間の事情、またジュンガリアの状

況が検討されている。著者はこの中でいくつかの注目される見解を出している。まずロシア政府がスパファリを清に派遣した前提についてである。もともと清側はガンチムール問題を話し合う爲にモスクワに使節派遣を要請していたがロシア側は長い間應じなかった。しかしその後ロシア側に以下のような情勢の變化が生じた。すなわち一六七〇年代に露清間貿易におけるブハラ人の活動が後退し、イルティッシュ経路によるロシア商人の活動が目覺しくなったこと、ロシアの國境貿易が盛んになったこと、そしてロシア人の中國へのルートがイルティッシュ路のみならず、外モンゴル經由、滿洲經由等六ルートになり、北京に到着した官營隊商は莫大な利益をあげるようになったこと、他方シベリア産の毛皮はヨーロッパで賣れなくなり、毛皮の市場として、また織物の供給地として中國に注目するようになった、等である。つまりロシア政府がスパファリの中國派遣を決定したのはロシア側の以上のような經濟的事情であつたとする。この見解は説得的である。

北京に到着したスパファリの清當局とのやりとりについて、著者は『露清關係史料』の他にイワノフスキーの編纂したスパファリ關係の滿文史料（奏摺）を多く利用する（すでにこの滿文史料はマニコルがその著書で利用しているが、著者はその中では日附に混亂があつて十分生かされていないと批判する）。著者はこの滿文史料により、他の史料の傳えていないスパファリの清當局に出したロシア皇帝の敕書、一二箇條からなるロシア側の清に對する要望書を譯出、紹介している。更に著者はこれに對する清側の回答、その後のスパファリと清當局のやりとりを詳細に記述する。結論として、スパファリと清當局との間に原則論の對立が生じて、スパファリが命

じられた兩國の外交關係の樹立、交易擴大という目的は失敗したが、清側には從來に比ベロシヤに對し柔軟な態度が見られるようになった、と指摘している。これらの論點はまことに明確であるが、これは滿文史料を十分活用し得たためであらう。

第七章においては一六八〇年代の沿アムールをめぐる露清交渉、一六八五年、八六年の二回に互る清軍のアルバジン攻撃等について検討している。まずゼーヤ河のロシアのドロンスキー砦の撤去についての露清交渉を記し、この交渉は不調に終わったが、「この段階では雙方がゼーヤ河沿岸の領有權を主張し、領土問題が表面に出て來た」としている。著者はこのような狀況の中で沿アムールに對する兩國の對應にふれ、清側は前進基地の建設、すなわち康熙二三年のアムール右岸での黑龍江城と黑龍江將軍公署の開設、更にロシアのアルバジン（雅克薩）の責任者に對してアルバジン、ネルチンスクから撤退するように勸告した、等の措置をとったこと、一方ロシア側は東シベリアの行政組織の整備、防衛の強化、モンゴルの中立化、更にはシベリアの土着民政政策（清へのガンチムール引渡し拒否とガンチムール死後、その子カタナイに對する破格の待遇）等の措置が取られたという。著者は二回に互る清のアルバジン攻撃について詳述するが、これに關連してシャスティナがこれは清の單獨行動ではなく、ハルハ・モンゴルとの共同作戦で、後者はネルチンスクを攻略することになっていたと述べている點に賛成し、更にいくつかの證據をあげている。なお第二回目のアルバジン攻撃は清側にとつて思うような成果をあげることが出來ず、撤退することになったが、その撤退の直接的理由について、著者はミヤスニコフが、ゴロヴィーン全權が到着するという知らせを聞いて、康熙帝は清軍が雅

克薩に留まっていればそこに全權が来るかもしれないので、それを嫌つて撤兵した、という見解を出したのを批判し、清側の史料を根據にアルバジンで「二回目の越冬を避けるのが眞の理由であつた。」と述べている。恐らくその通りであらう。

第八章ではネルチンスク會談に焦點があてられ、ロシア全權大使ゴロヴィーンの派遣、露清會談の場所がセレンギンスクからネルチンスクに移つた事情、ネルチンスク會談の進行狀況について検討が加えられている。著者がこの中で特に注目しているのは、ゴロヴィーンに對するロシア使節廳の訓令である。すなわち著者は使節廳が訓令を發する度にその内容を變えたことを指摘している。まず出發に際し與えられた一六八六年一月二〇日附の一一項目に互る訓令と、ウジンスクで受け取つた一六八五年六月一四日附の七項目の訓令とを、要約ではあるが内容を紹介し比較を試る。それによると第一回目の訓令では國境をアムール河とすること、交渉は國境ですること、アルバジン砦は確保すること等強硬であつたが、第二回目の訓令ではアルバジン砦撤去を認めるなどロシアの態度が一步後退したという。この理由について著者はデミドワの見解に賛成し、ダウリヤの情勢變化というよりはロシア政府内部の權力鬭争によるものだと述べている。ゴロヴィーンには更に一六八七年一月附の第三回目と一六八九年一月五日附の第四回目の訓令が與えられたが、著者はやはりこれらについても詳しく紹介し、第三回目の訓令では國境線をアルバジンまで後退させたり、北京で交渉をしてもよいとしたことと、第四回目の訓令ではアルバジン放棄をも認める等、一層讓歩の態度が見られたという。他方著者は清側代表團に對する康熙帝の訓令についても言及する。すなわち一六八八年五月、セレンギンスク

で豫定されていた會談に向け出發した使節團に與えられた訓令においては國境はアルバジンのみならずネルチンスクをも確保すること、それが認められなければ會談をやめて歸國するように、との強硬なものであったが、後にネルチンスクで開かれることになった會談に向け出發した使節團に對する訓令（一六八九年六月附）においては、ネルチンスクはロシア領とし、アルグン河を境界としてもよいという現實的柔軟路線に變つたことを指摘している。その理由について著者は外モンゴルへのガルダンの侵入とガルダンがロシアと手を結ぶのではないかという危懼があつた等をあげているが、妥當であらう。兩國がネルチンスクでの會談の席に就くまでを著者はこのように明解かつ平易に記しているが、扱い困難な史料を巧みに利用されているだけに改めて感心させられる。

ネルチンスクでの會談の進行について、著者はゴロヴィーンの報告書、ペレイラ、ジュルビヨンの日記をもとに、それらを對比検討している。會談は八月一二日から八月二八日まで一七日間に亘って行なわれたが、著者は日を逐つて、その日にどういふ議論がなされ、どう結着したかを詳細に記している。それによると會談の多くは國境線の畫定問題に費され、アルバジン問題でも雙方が厳しく對立したが、結局清側は自らの第二案を強硬に主張し、難色を示すロシア側を押し切つて、最終的にその線で合意したという。著者はまた條約文の細かい結めのやり取りにもふれ、雙方が提示した草案とそれに對する修正案の應酬を示し、最終的條文がどのようにして作成されたかを記している。

著者はまたゴロヴィーンの報告書とペレイラ、ジュルビヨンの日記に記される日附のずれに注目する。例えば條約調印の日は八月二

八日であるのにゴロヴィーンの報告書では八月二九日になっている等である。著者によればこれはゴロヴィーンの方に作爲があるという。すなわちゴロヴィーンが清側に譲歩をした（ロシア側の最終案で結着した）ことから、體裁をつくらうて、十分時間をかけ訓令に沿うようねばり強く交渉したように見せかけた爲であるとしている。穿つた見方である。このように著者によつてネルチンスク會談の進行、條約の締結の事情が初めて明らかにされたわけで、その意義は大きいと言えよう。

第九章においてはネルチンスク條約締結後の様々な問題が検討されている。ここでもいくつかの興味ある見解が出されている。一つはネルチンスク會談におけるロシア全權大使ゴロヴィーンの手腕に對する評價である。著者によれば現在のソ連の學會において、同條約の結果アムール河流域、アルバジンを清に「讓つた」ことはゴロヴィーンの戰術的誤りとして、彼は低く評價されているという。しかし著者はむしろ彼の手腕を高く評價し、當時の情勢としてはやむを得ないものがあつたこと、ロシア政府は彼の條約締結について高く評價したこと、彼は新帝ピョートルの下でその外交を助けるなど輝かしい外交經歷を持つていること、等の具體的例を擧げて批判している。著者の言う通りであらうが、個人の業績に對する評價は時代によつて變わるものであり、この種の議論は必ずしも噛み合わないいきりがある。著者はまた條約文の内容について検討をすすめ、特に滿文條約文（ロシアが持ち歸つたもの）と滿文『聖祖實錄』所載の同條約文とを比較し、滿文實錄のものは漢文實錄のものと實は一致していることを指摘している。從來漢文實錄のものはともかく滿文實錄の所載のものは本來の條文に近いのでは無いかという見解

があつたから、この指摘は意義のあるところである。

更に條約に基く界碑の設置について一つの見解を出している。從來の説では『聖祖實錄』康熙二八年二月一日の記述により、條約締結後すぐに遣官立碑が行なわれたとされていた。しかし著者はこれに疑問を出す。すなわち著者によれば郎談が康熙二九年三月にアルグン河に立てた碑というのは、當時ガルダンのハルハ侵入があつた爲に、本格的な立碑ではなかつたという。著者は本格的な立碑は康熙四〇（一七〇一）年のことであるとし、『清代中俄關係檔案史料選編』所載の史料で實證している。但し界碑がゴルヴィツァ河とアルグン河の二箇所に建てられたのか、一箇所だけなのかは分らないが、デュアルドの『支那帝國誌』第四卷附載の、一七一〇年實測の地圖、康熙四九年の黑龍江流域圖等にゴルヴィツァ河畔に界碑が明記してあるから、ここに界碑が建てられたことは間違いないとする。

著者は本章の最後で條約締結後のロシアの北京貿易についてふれる。特に第一回（一六八九年二月）と第四回（一六九三年九月モスクワ出發）のロシア側の使節團について記しているが、中でも第四回、イデスを隊長とする使節團と清側との交渉について注目し、イデスの六項目に互る清への要求、それに對する清側の回答、更に六項目に互る索額圖の通達等を詳しく紹介している。著者はこのイデス使節團の意義について、康熙帝にネルチンクス條約遵守の意志を確認出来たこと、ロシアの北京貿易が軌道に乗ったこと、更にその成果をもとに北京貿易がロシア政府の獨占事業になっていったこと等を擧げている。なお著者は索額圖通達に關連して、乾隆「大清會典事例」に「康熙三十二年議準す。俄羅斯國の貿易人は二百名を過

ぐるを得ず。三年を隔てて來京すること一次。」と記されていることに注意する。著者は、索額圖通達には二〇〇名に限るとはあるが、三年に一次という條項は無いことを指摘、『會典事例』の記事は後のキャフタ條約で規定されたものが誤つて挿入されたものであること、このことはロシアの隊商が、一六八九—一六九七年は毎年、また一六九八—一七一八年は隔年に北京に到來しているが、清側とは何のトラブルも無かつたことによつて證明されるという。まさにその通りで、これは一つの事實の發見でもあるが、これも著者が史料に細心の注意を拂つていることによるものであらう。

第一〇章は結びであるが、ユニークな形をとっている。すなわち *Русско-китайское отношение XVII века. Том II* のニッコフの解説から八項目に互る問題點をとり出し、それに對する著者の見解（批判）を述べるという形をとっている。

第一點。沿アムールの領有問題についてであるが、基本的論點は第二章と同じであり省略する。第二—第八點はネルチンクス條約についての問題である。

第二點。ミヤスニッコフの見解（以下同）。「ネルチンクス條約は優勢な滿洲の兵力による脅迫のもとで調印されたもので、ゴロヴィーンはこの脅迫によりロシア領であつたアムール左岸とアルグン右岸の廣大な領土を讓ることを餘儀なくされた。」これに對し著者は、ゴロヴィーンの手腕を評價する者もあつたこと、清の部隊がロシア側に壓力をかけたのは事實であるが、ロシアが背んじないことまで脅迫して調印したものではないこと、「要するにこの條約は當時の兩國の相互關係を反映し、落着くべき所に落着いたと見るべきである。」と述べている。

第三點。「ロシアはネルチンスク條約畫定でアムール河という輸送動脈から切り離された爲損害を受けた。それは中國貿易によつて償えるものではなかつた。」これに對し著者はアムール水系は清朝も同じく重視したこと、當時の情勢でロシアとして中國貿易を捨て、アムール河を取るといふ選擇は許されなかつた、と述べる。

第四點。「ネルチンスク條約は法律文書として全く不完全なものである。その理由は條約の諸テキストが食い違ひ、地圖の交換も行なわれなかつた。現地における國境設定は行なわれず、特別な文書で正式に批准もされなかつた。従つて通常の意味で國境は定められなかつた。」これに對し著者は逐一反論する。條約文については雙方署名交換したのはラテン文だけで、これを正文とすべきである。雙方に交換されたものに若干の形式の違いはあるが、本文は同じでその違いを問題とするに足らない。地圖の交換が無かつたこと、國境畫定が行なわれなかつたこと、これらは事實であるが、會談においては雙方互いに地圖を持ち寄つて國境畫定をしているし、「吉林九河圖」「ペテリン圖」は雙方が持ち寄つたと思われる地圖と密接な關係があるが、そこに記されている國境は一八五八年以前の國境であり、この點は他の地圖からも證據づけられる。従つて國境が定められなかつたといふのは言い過ぎである、と述べる。

第五點。「アルグン河に建てた露、漢、蒙、滿、ラテン語の條約文を記した石碑は記念碑とでも言うべきものである。清政府は條約の條項を一方的に解釋したり、偽造したり、削除したりした。また小ゴルヴィツァ河國境を二〇〇Kmも西に移動させたりした。」著者はこれらについても清政府が漢文條約の條文を變えたのは中國優越を誇示しようとした國內向けのものであり、また國境移動説も種

種の誤解にもとづくものである、と退けている。以上のミヤスニコフに對する著者の批判は正當であり、史料的にも裏付けられている。

第六／第八點。「一七世紀アムール河國境畫定を扱つた清朝及び中華民國の歴史書は條約の眞實の内容を明らかにせず、その領土に對する滿洲人の權利を正當化しようとした務めて來た。中華人民共和國の歴史家も同様である。一方ソ連の研究は同條約について正しい評價をしている。この條約はロシアがむりやり押しつけられたものである。愛琿條約および北京條約は最終的に沿アムール歸屬の問題を解決した。それは武力による示威の結果ではなく、一七世紀前半からロシア領になつてた領土を回復しようとしたツァー政府の外交上の努力を完成させたものであつた。」著者はこれらの點について自らの意見を述べず、「本書は全巻を通じてその見解に對して所見を述べている形になっている」とだけ記す。もちろん著者の意圖は十分読みとれる。しかしこの部分にはかなり獨善的な見解が見られ、従つて著者なりに眞つ向から批判を加えてもよかつたと思われる。

附録として條約のラテン文の和譯と臺北の國立中央圖書館所藏の「吉林九河圖」の寫し(カラー)が附せられている。この地圖を公けにすることが出來たのも著者の熱意の賜物であり、敬意を表する。

尙本書には不注意と思われる誤りが若干あるので指摘しておく。一九三頁、第三行。「煙草二〇留」としているが原文では「二〇ブード」である。一四〇頁、第九行。「タタル文」と譯しているが原文は *Туркмен языкы* (トルコ語)である。一九二頁、第

三行。「五月二〇日（6月11日）アルバジン到着」としているが、『聖祖實錄』卷二二（10—a葉）にはアルバジン（雅克薩）到着を「五月三日」としている。一九二頁、第九行。清のアルバジン攻撃の際、アルバジンに集結したロシア側の人員について「農民二九〇名、計六六〇名」としているが、農民の数は九七名であり、従って計四六七名となる。二〇三頁、第二十七行。二一四頁、第一三行。著者はいずれもN・シヤラノフとしているが正しくはN・シヤラポフ Шапов である。なおこの誤りは四八一頁右の人名索引でも踏襲されている。二二五頁、第一一—四行。康熙帝の諡の部分。著者はこの「諡」を『聖祖實錄』卷一三五と『平定羅刹方略』卷四から引用したとしている。しかし『方略』ではこの文は索額圖の上奏文となっており、『實錄』では若干文章の構成が異なるものの康熙帝の諡となっている。著者は『方略』の文を基礎にして、そこに記されている臣を朕に、或いは臣を爾に書き變えて、「康熙帝の諡」としているが、そのことについて何もふれていないのは問題である。二五五頁、第一九行。當初セレンギスクで開催されるはずであった露清會談に向かった清側の代表團が歸化城を出發した日を6月7日としている。しかし『出塞紀略』には五月二〇日は「不行」とし、翌二二日に「行十餘里」と記されている。五月二二日はユリウス暦6月8日にあたる。二四二頁、第三三行。著者は「ネルチンスクのポヤーリンの子」、「シベリアのポヤーリンの子」と譯しているが、原文は前者が *сыный боярский* 後者が *дети боярские* である。前者は士族階級、後者は一種の小領主を指すらしいが、「ポヤーリンの子」という譯は適當でない。三二六頁、第七行。ネルチンスク條約締結後の露清貿易について、ロシア側の人員を、

「第四回が二〇九名、第五回が一五七名であったほかは、いずれも一〇〇名未満であった」と記している。しかし第六回、一六九六年出發の隊員の數も、勤務員の數は不明であるが、それ以外で一三三名を數えているからこの時も一〇〇名は超えていたのである。この他に註の部分に誤植が目立つ。また敢て要望するならば索引に氏族、部族名を、更には事項も加えて欲しかった。

本書における史料の読み方、解釋については無理がなく、それだけに著者の主張も概ね正論で、讀者をして十分納得せしむるものがある。本書は一七世紀の露清關係史とネルチンスク條約に関する優れた研究で、今後の同研究の一大指針ともなるものであるが、このような大著をもにされた著者に心から敬意を表する次第である。

註

- (1) 『ロシアの東方進出とネルチンスク條約』補論』『日中經濟協會報』五、一九八五年、五月。五〇—五一頁。
- (2) 若松寛「ガンチムールのロシア亡命事件をめぐる清・ロシア交渉出」『京都府立大學學術報告』第二十五號、昭和四八年、二七頁。
- (3) 同、二七頁。
- (4) В. А. Александров, *Россия на дальневосточных рубежах (вторая половина XVII в.)*. Москва, 1969, стр. 128.
- (5) там же, стр. 206.

一九八四年二月 東京 財團法人東洋文庫 近代中國センター
B5版、五〇九頁